明恵撰『摧邪輪』巻中　訓・註　試稿（五）

米澤　実江子

承前（『佛教大学　法然仏教学研究センター紀要』第一号・二号・三号・四号）

キーワード

明恵・『摧邪輪』・訓読文・註記

【報告範囲】

「二四丁表五行目より三三丁表九行目」までを挙げ「試稿」とした。

【凡例】

一、底本は、佛教大学附属図書館蔵「寛永年間版（準貴重書　G極楽寺／377）」とし、始めに書き下し該当箇所を翻刻し、次に書き下しとその註記（通し番号）を挙げた。

一、翻刻にあたっては、底本の字体を残した。書き下しに際して、通行の字体に改めた。

一、翻刻部、【　】の内、丁数とオ（ウ）を示す場合は、底本の丁数とその表（裏）を指し、漢数字と上（下）を示す場合は『鎌倉旧仏教』翻刻部の頁とその上（下）を指す。

一、〈　〉は原割り注。

一、訓読文において、返点・送り仮名は、原則底本に従ったが、送り仮名は適宜補った。

一、訓読文において、典籍引用部は改行して二文字下げた。また引用末の「～云々（云云）」は、「～、と云々（云云）。」とした。

一、訓読文において、明恵の設問とその答えは、それぞれ改行した。

一、注記における引用出典の略称は以下の通りである。

『昭法全』（『昭和新修法然上人全集』）
『浄全』（『浄土宗全書』）
『大正蔵』（『大正新脩大蔵経』）
『望仏』（『望月佛教大辞典』増訂版）
『中仏』（中村元著『広説佛教語大辞典』）

『織田仏』（織田得能著『織田佛教大辞典』）
『大漢和』（諸橋轍次著『大漢和辞典』）
『日国』（『日本国語大辞典』第二版）
『漢和大辞典』（藤堂明保編『学研　漢和大辞典』）

〔付記〕

当研究班研究課題の底本として、佛教大学附属図書館所蔵本を使用させて頂きました。佛教大学附属図書館のご厚情に感謝申し上げます。

《翻刻》【二四丁オ五行】【三五〇頁上】
問日。大菩提心是爲諸佛之一道故、信樂此經之人、即親属如來智身故、非云今現在我前乎。何必可云滅後之凡身在佛前乎。荅。不然。上文既云我見彼衆生、悉知彼所行、亦知彼名字、我見悉無导、正授記時、云今現在我前等、即是在佛【三五〇頁下】前也。如彼蓮華面經上巻説。告阿難言、汝【二四丁ウ】今欲見未來事不。我見來世如觀現在。〈乃至〉爾時阿難、作如是念。以佛力故、可令我見未來之世如是事不。爾時如來、以神通力、即令阿難悉見未來諸惡比丘。以兒坐膝、置婦其傍。復見種種諸非法事。爾時阿難、見此事已、心大怖畏、身毛皆竪。即白佛言。世尊、如來速入涅槃。今正是時、何用見此未來之世如是惡事。〈巳上〉此經説亦如是。滅後衆生樂欲此經人、正在佛前也。

《訓》
問ひて曰はく。大菩提心は、是れ諸仏の一道とするが故に、此の『経』を信楽するの人は、即ち、親しく、如来の智身[1]に属するが故に、「今現在我前」と云ふに非ずや。何ぞ必ずしも「滅後の凡身、仏前に在り」と云ふべきや。
答ふ。しからず。上の文に既に「我見彼衆生、悉知彼所行、亦知彼名字、我見悉無碍[2]」と云ひて、正しく授記する時「今現在我前」等と云ふ。即ち是れ仏前に在るなり。
彼の『蓮華面経』の上巻に説くがごとし。
阿難に告げて言はく。汝今、未来の事を見んと欲ふやいなや。我れ、来世を見ること、現在を観るがごとし。〈乃至〉
爾の時に阿難、是のごときの念を作す。仏力を以ての故に、我をして、未来の世の是のごときの事を見せしむべきやいなや。
爾の時に如来、神通力を以て、即ち、阿難をしてことごとく未来の諸悪比丘を見せしむ。兒を以て膝に坐へ、婦を其の傍に置けり。また、種種のもろもろの非法の事を見る。
その時に阿難、此の事を見巳[ママ]りて、心、大いに怖畏して、身毛皆竪つ。即ち、仏に白して言はく。世尊如来、速かに涅槃に入りなん。今正しく是の時なり。何を用ゐてか、此の未来の世の是のときの悪事を見んや[3]〈巳[ママ]上〉。
此の『経』説もまた是のごとし。滅後の衆生、此の『経』を楽欲せん人、正しく仏前に在るなり。

註
（1）「智身」、華厳宗の教学で云ふ「解境十仏」の一つ・完全な智慧を仏

身としたもの（『中仏』中、一一七二頁）。→「解境十仏」解悟の境界に十仏・解行十身・華厳円教の菩薩の解悟照了の境界は万差なるも束ねて十身（衆生身・国土身・業報身・声聞身・辟支仏身・菩薩身・如来身・智身・法身・虚空身）と為・初めの三身は染分、次の六身は浄分、後の一は不二分なり（『望仏』一、八五七頁）。

（2）【参照】『摧邪輪』巻中、二三丁オ。

（3）『蓮華面経』、『大正蔵』十二、一〇七二頁中～一〇七三頁上。

《翻刻》

諠依上下文意、仰推佛言、於如來滅後、此經典流通。比丘獨處練若、適得此經典、見所聞此經者、今現在我前、彼等於後世、此經當現前記文、比丘悲泣雨【二五丁オ】涙當言。我已（ママ）得授記、何業獲此果等。〈爲言〉

《訓》

謹んで上下の文の意によりて、仰ぎて仏言を推するに、如来滅後において此の経典流通せん。

比丘独り練若に処して、適此の経典を得て、「所聞此経者、今現在我前、彼等於後世、此経当現前」の記の文を見て、比丘悲泣して涙を雨ふらしてまさに言ふべし。「我れ已に授記を得たり。何の業ありてか此の果を獲たる」等と〈為言〉。

《翻刻》

泣註經文、筆跡忽如暗。南無大恩教主釋迦牟尼世尊、南無諸部甚深菩提心經、願我縱雖焦洞燃猛火之炎閇堅固寒氷之底、若有口者、唱此記文、若有心者、念此妙典。金口所記、忝如是。哀哉悲哉矣。汝雖不加悲泣隨喜之言、莫作滅時無益之論。滅時隔乎數萬億歲。經典當今住世。若以値遇爲幸者、滅時亦値遇。汝不然。故手觸卷軸、心不生樂欲。萌佛樹芽茎、期何時乎。

《訓》

泣『経』文を註するに、筆跡、忽ちに暗むがごとし。南無大恩教主釈迦牟尼世尊、南無諸部甚深菩提心経、願はくは、我れ、たとひ洞燃猛火の炎に焦がれ、堅固寒氷の底に閉ぢらるると雖も、もし口あらば、この記の文を唱へ、もし心あらば、この妙典を念ぜん。金口の記する所、忝くも、是のごとし。哀なるかなや、悲しきかなや。汝、悲泣随喜の言を加へずと雖も、滅時無益の論を作すこと莫れ。滅時は数万億歳を隔つ。経典は、当今、世に住せり。もし値遇を以て幸とせば、滅時にもまた値遇せん。汝はしからず。故に、手を巻軸に触れて、心に楽欲を生ぜず。仏樹の芽茎を萠さんこと、何れの時をか期せんや。

《翻刻》

又此經典、弥陁願力加被、於五濁惡世中得聞。即如經云。我昔婆羅門、依於比丘活。時比丘放逸、說此修多羅。【二五丁ウ】梵志於彼聞、時至而乞食。泣涙已（ママ）行出。是時心作願。我於

修多羅、杪義及文字。後世作證明、亦復行擁護。以彼善業果、於彼後【三五一頁上】末世、得此修多羅、執持在其手、彼時有比丘、悲泣涙滿目。當時作懺悔、後得此經法、於先業滅盡。彼時有相現。於其睡夢中得此修多羅。生死諸流轉、欺誑大恐怖、斯由阿弥陀願力、如是果〈文〉。

《訓》

また此の経典は、弥陀の願力加被して、五濁悪世の中において聞くことを得。即ち『経』に云ふがごとし。

我れ昔し婆羅門として、比丘に依りて活す。時に比丘ありて、放逸なりしかども、此の修多羅を説く。梵志、かしこにて聞きて、時至りて乞食す。泣涙し已りて行き出づ。是の時に、心に願を作す。「我れ修多羅において、義および文字を杪せん。後世まで証明を作し、また、擁護を行ぜん」と。かの善業の果を以て、かの後の末世において、此の修多羅を得て、執持してその手に在き、彼の時に比丘ありて、悲泣して涙目に満つ。当時に懺悔を作して、後に此の経法を得て、先業において滅尽す。かの時に相現ずることあり。その睡夢の中において、この修多羅を得たり。生死のもろもろの流転、欺誑大恐怖、これ阿弥陀仏の願力によりて、是のごときの果あらん〈文〉。

註

（4）「杪」、『大正蔵』は「鈔」→「鈔」うつす・かすめる（『大漢和』十一、五〇四頁）。

（5）『出生菩提心経』（『大正蔵』十七、八九五頁、上）。

《翻刻》

解曰。二人悲泣深起値遇願。依念願甚深、終得此経法。彼依自善根力、於末世得値遇。薄福衆生、生死流転、欺誑大恐怖中得聞此経、此由阿弥陀願力也。如是果者、如二人依願力得聞経果、諸衆生亦依弥【二六丁オ】陀願力、於末世大恐怖中、可得聞経果也。

《訓》

解して曰はく。二人悲泣して深く値遇の願を起こす。念願甚深なるによりて、終にこの経法を得たり。かれは自らの善根力によりて、末世において値遇することを得。薄福の衆生、生死流転・欺誑大恐怖の中にこの『経』を聞くことを得んは、これ阿弥陀の願力によりてなり。是のごときの果とは、二人、願力によりて、聞経の果を得るがごとく、諸ろの衆生もまた弥陀の願力によりて、末世大恐怖の中において、聞経の果を得べきなり。

《翻刻》

問曰。見経文相、非指上二人所得聞経果、云依弥陀願力乎。何作此釈乎。荅。上二人中婆羅門者、即是釈迦如來因位也。不可云対迦葉婆羅門之語。下文云梵志於彼聞時至而乞食等者、梵志

者即婆羅門、出上能聞人一也。然者弥陀如來、依二釋迦勸化一、値二寶藏佛一、發二菩提心一。豈彼聞経果、可レ云レ依二弥陀一乎。

《訓》

問ひて曰はく。『経』の文相を見るに、上の二人所得の聞経の果を指して「弥陀の願力による」と云ふに非ずや。何ぞこの釈を作るや。

答ふ。上の二人の中に、婆羅門とは即ち是れ釈迦如来の因位なり。「迦葉婆羅門に対するの語なり」と云ふべからず。下の文に、

梵志於彼聞時至而乞食[6]

等と云ふは、梵志とは即ち婆羅門、上の能聞の人[7]を出すなり。しからば、弥陀如来、釈迦の勸化によりて、宝蔵仏に値ひて菩提心を発す[8]。豈に、「彼の聞経の果、弥陀による」と云ふべけんや。

註

(6) 『出生菩提心経』、『大正蔵』十七、八九五頁上（『摧邪輪』巻中、二五丁左）。

(7) 『出生菩提心経』、『大正蔵』十七、八九五頁上。

(8) 『悲華経』、『大正蔵』三、一八三頁中～下（『摧邪輪』巻上、十八丁オ～十九丁オにて引用・解釈）。

《翻刻》

是故當レ知。言レ如下我依二願力一於二末世一得中此經上。未來末世衆生、依二弥陀願力一、亦可下レ得レ(ママ)此經上也。若設雖レ言レ結二上文一、若言三末世得一聞、依二弥陀願力一者、此亦可レ同。然者感二弥陀願力一時、同依二弥陀願力一、可レ聞二此經一也。

《訓》

是の故に、まさに知るべし。「我れ願力によりて末世においてこの『経』を得るがごとく」と言ふ。未来末世の衆生、弥陀の願力によりてもまたこの『経』を得べしとなり。もし、たとひ「上の文を結す」と言ふと雖も、もし「末世の得聞、弥陀の願力による」と言はば、これもまた同ずべし。しからば、弥陀の願力を感ぜん時、同じく弥陀の願力によりてこの『経』を聞くべきなり。

《翻刻》

欺誑大恐怖者、出下末世感二遺法果一衆一生過上也。如二法華云一、恐怖悪世中等。(ママ)又如二大般若云一、後一五百一歳無一上正一法、将レ欲二壊滅一時、有二大恐怖一、有二大險難一、有二大一暴悪一。當二於彼時一、諸有情類、多分成下就感二遺法一果上等、諸經中有二此文一。

《訓》

「欺誑大恐怖」とは、末世に遺法の果を感ずる衆生の過を出すなり。『法華』に云ふがごとし。

恐怖悪世中[9]、等に。

また『大般若』に云ふがごとし。

後の五百歳、無上正法、まさに壊滅を欲せんとする時、大恐怖あり、大険難あり、大暴悪あらん。かの時に当りて、もろもろの有情の類、多分は遺法を感ずる果を成就せん[10]

等、諸経の中にこの文あり。

註

（9）『妙法蓮華経』、『大正蔵』九、三六頁中。

（10）『大般若波羅蜜多経』、『大正蔵』五、一一〇九頁中。

《翻刻》

良以、阿弥陀大願中云発菩提心修諸功徳等。若無菩提心者、往生浄【三五一頁下】土行難立。依此、弥陀願力爲増上縁、留此経典、今衆生勸発菩提心也。弥陀教止末世。良有所由乎。

《訓》

良におもんみれば、阿弥陀の大願の中に

発菩提心、修諸功徳[11]

等と云ふ。若し菩提心無くんば、往生浄土の行、立し難からん。これによりて、弥陀の願力、増上縁としてこの経典を留めて、衆生をして発菩提心を勸めしむるなり。弥陀の教へ、末世に止まること、良に所由あるをや。

註

（11）『無量寿経』、『大正蔵』十二、二六八頁上。

《翻刻》

以此而言、若此経亦法滅時可言止住乎。何者、止住百歳文、雖依釈尊慈悲、法滅時衆生、往生浄土、亦依弥陀願力也。若爾者、【二七丁オ】既依彌陀願力、於末世聞此経。二俱依願力者、此経何不至法滅時乎。経道流布時、何必限彌陀願力。假彼願力者、出難聞時也。下経文云於後當顯曜者、此経依弥陀願力、於末世顯曜也。

《訓》

これを以て言へば、もしこの『経』もまた法滅の時に止住すとや言ふべきや。何とならば「止住百歳」の文は、釈尊の慈悲によると雖も、法滅時の衆生、浄土に往生せんこともまた弥陀の願力によるなり。もししからば、既に弥陀の願力によりて、末世において、この『経』を聞かん。二つ俱に願力によらば、この『経』何ぞ、法滅の時に至らざらんや。経道流布の時は、何ぞ必ずしも弥陀の願力に限らん。かの願力を仮るは、聞き難き時を出すなり。下の経文に

於後当顯曜[12]

と云ふは、この『経』、弥陀の願力によりて末世において顯曜するなり。

註

（12）『出生菩提心経』、『大正蔵』十七、八九五頁中（「當」字、『大正蔵』「常」）。

《翻刻》

問曰。無量壽經云。特留二此經一止一住一百歳〈文〉。若兼二餘經一者、不レ可レ云二特留一。如一何。荅。教體無相。何滞二巻軸一。若依二彌陁願力一而留者、即是弥陁一教止住也。更勿レ守二巻數加減一。何必立二餘經名一乎。但此義不二必定執一。若非二道理一者、且為下對二汝非理執一、我亦致中非理難。是爲二婆娑論一問荅例法一。盡レ理妙術、顯レ義方軌也。若彼此俱非實義一者、其得失如一何。

《訓》

問ひて曰はく。『無量寿経』に

特にこの『経』を留めて止住せしむること百歳〈文〉。[13]

と云ふ。もし、余経を兼ぬれば「特留」と云ふべからず。いかんぞ。

答ふ。教体は無相なり。何ぞ巻軸に滞らん。もし、弥陀の願力によりて留まらば、即ち是れ弥陀一教の止住なり。更に巻数の加減を守ることなかれ。何ぞ必ずしも余経の名を立てんや。ただし、この義は、必ずしも定めて執せず。もし、道理に非ざれば、且く汝が非理の執に対して、我もまた非理の難を致すとせん。是れ『婆沙論』の一の問答[14]の例法とす。理を尽す妙術、義を顕す方軌なり。もし、かれ・これ俱に実義に非ずんば、その得失、いかんぞ。

註

(13) 『無量寿経』、『大正蔵』十二、二七九頁上。

(14) 【参考】『阿毘達磨大毘婆沙論』、『大正蔵』二七、二二一頁中～二二二頁。

《翻刻》

謂。若【二七丁ウ】以レ滅爲レ留、我有二遊心之得一。亦有下勇二行人一之益。若以レ留爲レ滅、汝有二無レ情之愆一、亦深法非二我分一。経既云斯由阿弥陀願力如是果一。汝爲二西方導師一者、須レ顯二揚此経典一。然抑二諸人欣樂心一。此豈非三違二害一弥陀願力一乎。悲哉悲哉。

《訓》

謂はく。もし、滅するを以て留むとせば、我は遊心の得あらん。また行人を勇ますの益あらん。

もし、留むるを以て滅すとせば、汝は情け無きの愆あらん。または、深法、我が分に非ざらん。『経』に既に云ふ。

斯由阿弥陀願力如是果[15]

汝、西方の導師たらば、すべからくこの経典[16]を顕揚すべし。しかるに、諸人の欣楽の心を抑ふる。これ、豈に、弥陀の願力に違害するに非らずや。悲しいかな。悲しいかな。

註

(15) 『出生菩提心経』、『大正蔵』十七、八九五頁上。

(16) 『出生菩提心経』。

《翻刻》

聞二比丘聞此経悲泣而雨涙等金言一、雖二破戒質一、悲涙洗レ面、雖二無慙心一、歡喜剰レ身。汝對二此経一、強勸二滅時損益一。為レ有二何詮一乎。無レ情之至

不レ可ニ稱計一。設雖ニ師子虎狼一、聞ニ此金言一、蓋レ生ニ哀悲一乎。此事匪ニ直一爾一也。設雖ニ汝自不ニ覺一悟一、決一定被ニ執一縛天魔一、出ニ此不忍之言一也。

《訓》

「比丘聞此経、悲泣而雨涙」[17]等の金言を聞けば、破戒の質[18]なりと雖も、悲涙、面を洗ひ、無慙の心なりと雖も、歓喜、身に剰れり。汝、この『経』[19]に対して、強ちに、滅時の損益を勘ふる、何の詮ありとやせんや。情なきの至り、称計すべからず。たとひ、師子・虎狼なりと雖も、この金言を聞かば、なんぞ哀悲を生ぜざるや。此の事、直爾に非ざるなり。たとひ、汝、自ら覚悟せずと雖も、決定して天魔に執縛せられて、この不忍の言を出すなり。

註

(17)『出生菩提心経』、『大正蔵』十七、八九五頁上。

(18)「質（ぜつ）」、かたちあるもの・物質・事物それ自体・本質・もちまえ・特質（『中仏』中、一〇一〇頁）。

(19)『出生菩提心経』。

《翻刻》

即如ニ此経言一、爾時【三五二頁上】迦葉婆羅門復白レ佛言。希有世尊、若諸衆一生、【二八丁オ】無レ有ニ智慧一、若聞ニ如レ是無上無邊一、乃至如レ是等衆生、當無レ有ニ智慧、若如レ是等無邊無上修多羅聞一已、不下能中於此法中不レ生ニ堅固樂欲一。大德世尊、有ニ何因縁一、既有ニ如レ是妙法一、然彼衆生而當ニ虚過一也。爾時佛告彼婆羅門一言。此三千大千世界有下百俱致〈凡言俱致者随数千萬〉諸魔宮殿上、彼一一魔有ニ俱致數魔衆眷属一、圍遶一彼諸魔軍一。常勤方便一欲レ滅ニ此經一、作ニ種種因縁一。彼因縁、隨ニ所在處一、作諸障导一。所以者何、若一以三千大千世界所有衆生、悉得ニ於阿羅漢果一、若有ニ善男子善女人一、聞ニ此修多羅一已、當レ發ニ阿耨多羅三藐三菩提心一。婆羅門以ニ是因縁一、令下【二八丁ウ】俱致數諸魔一勤ニ求方一便一欲レ滅ニ此經一。所一以者何、此修多羅是一切諸法種姓根本。以ニ是義一故、俱致諸魔、勤ニ求方便一、欲レ滅ニ此経一〈巳上〉。

《訓》

即ち、この『経』に言ふがごとし。

その時に迦葉婆羅門、また、仏に白して言はく。希有なり世尊。もしもろもろの衆生、智慧あることなくとも、もし是のごときの無上無辺を聞かん。乃至、是のごとき等の衆生、まさに智慧あることなくとも、もし、是のごときらの無辺無上の修多羅を聞き已らば、この法の中において、堅固の楽欲を生ぜざること能はざらん。大徳世尊、何の因縁ありてか、既に是のごときの妙法あらんに、しかもかの衆生、しかもまさに虚しく過ぐべきや。

その時に仏、かの婆羅門に告げて言はく。この三千大千世界に、百俱致〈凡そ俱致と言ふは、数、千万に随ふ〉のもろもろの魔の宮殿あり。かの一一の魔に、俱致数の魔衆・眷属ありて、かのもろもろの魔軍を囲遶せり。常に方便を勤めて、この『経』を滅せんと欲して、種種の因縁を作す。かの因縁、所在の処に随ひて諸の障碍を作す。所以は、何んとならば、たとひ、三千大千世界の

所有の衆生、ことごとく阿羅漢果を得とも、もし、善男子・善女人ありて、この修多羅を聞き已らば、まさに、阿耨多羅三藐三菩提心を発すべし。

婆羅門、この因縁を以て、俱致数の諸魔をして、方便を勤求して、この『経』を滅せんと欲せしむ。所以は、何んとならば、この修多羅は、是れ「一切諸法の種姓根本なり」と。この義を以ての故に、俱致の諸魔、方便を勤求して、この『経』を滅せんと欲す。[20]〈已上〉。

註

(20)『出生菩提心経』、『大正蔵』十七、八九五頁下。

《翻刻》

解曰。此中言皆悉得於阿羅漢果者、小乗極果聖者、指難發大乗菩提心人也。設三千大千界衆生、皆悉雖證此小果、聞此經者、可發大乗菩提心。以有此功力故、諸魔依障導菩提心、將破滅此經也。此經即菩提心経根本也。婆羅門請問語云。有何因縁、既有如是妙法、然彼衆生而當虚過也〈文〉。

《訓》

解して曰はく。此の中に「皆悉得於阿羅漢果」[21]と言ふは、小乗極果の聖者、大乗の菩提心を発し難き人を指すなり。たとひ、三千大千界の衆生、皆ことごとくこの小果を証すと雖も、この『経』を聞かば、大乗の菩提心を発すべし。この功力あるを以ての故に、諸魔、菩提心を障碍するによりて、まさにこの『経』を破滅せんとするなり。この『経』は、即ち『菩提心経』の根本なり。婆羅門請問の語に云はく。

何の因縁ありてか、既に是のごときの妙法あらんに、しかも、かの衆生、まさに虚しく過ぐべきなり[22]〈文〉。

註

(21)『出生菩提心経』、『大正蔵』十七、八九五頁下～八九六頁上。

(22)『出生菩提心経』、『大正蔵』十七、八九五頁下。

《翻刻》

次佛荅如此。汝爲佛弟子、何無樂欲、然作此說。即如經說。被迷乱彼俱胝數魔儻也。此經不待法滅時、依【二九丁オ】汝邪言速可滅。雖然如來爲防此障難、說破魔衆會陀羅尼、加持之。即如此經云。爾時佛告婆羅門、今有修多羅、名曰破魔衆會。汝等受持讀誦、即得破魔天衆會。〈乃至〉爾時世尊、【三五二頁下】即說陀羅尼曰〈云云〉。

《訓》

次に仏荅、かくのごとし。汝、仏弟子として、何ぞ楽欲なくして、しかもこの説を作す。即ち『経』に説くがごとし。かの俱胝数の魔儻に迷乱せらるなり。この『経』、法滅の時を待たず、汝が邪言によりて速やかに滅すべし。しかりと雖も、如来、この障難を防がんが為に、

「破魔衆会陀羅尼」を説きて、これを加持したまふ。即ちこの『経』に云ふがごとし。

その時に、仏、婆羅門に告げたまはく。今、修多羅あり。名づけて「破魔衆会」と曰ふ。汝ら受持・読誦せば、即ち、摩天衆会を破することを得ん。〈乃至〉その時に世尊、即ち、陀羅尼を説きて曰はく、(23)と云云。

註

(23)『出生菩提心経』、『大正蔵』十七、八九五頁下～八九六頁上。

《翻刻》

當知。汝雖作邪説、此経典不滅者、依此陁羅尼威力也。今爲加持、汝魔縛故、雖須唱陀羅尼、其秘密章句、不可不密。若不傳受灌頂阿闍梨而自諷誦之、師弟倶得重罪。恐男子女人輙諷誦、故不出之。如來既云知樂欲人所行名字、亦可知不樂欲人所行名字。爲防彼障難説陀羅尼。當今男子女人、須持念此陀羅尼也。汝既有此【二九丁ウ】大過、聖道浄土二門行者、先須遠離汝。次可弃捨此選擇集也。

《訓》

まさに知るべし。汝、邪説を作すと雖も、この経典滅せざるは、この陀羅尼の威力によりてなり。今、汝の魔縛を加持せんが為の故に、すべからく陀羅尼を唱ふべしと雖も、その秘密章句、密せずはあるべからず。もし、灌頂阿闍梨に伝受せずして、自らこれを諷誦すれば、師弟倶に重罪を得。男子・女人、輙く諷誦せんことを恐るるが故にこれを出さず。如来、既に「楽欲の人の所行名字を知る」(24)と云ふ。また楽欲せざる人の所行名字を知るべし。「かの障難を防がんが為に陀羅尼を説く」と云へり。当今の男子・女人、すべからくこの陀羅尼を持念すべきなり。

汝、既に此の大過有り。聖道・浄土、二門の行者、まづすべからく、汝を遠離すべし。次にこの『選択集』を棄捨すべきなり。

註

(24)『出生菩提心経』、『大正蔵』十七、八九四頁中～下。

《翻刻》

從此第五破菩提心云抑念佛過者、集曰。

釋尊不付属定散諸行、唯以念佛付属阿難之文。

觀無量壽經云。佛告阿難。汝好持是語。持是語者、即是持無量壽佛名。

同經疏云。從佛告阿難汝好持是語以下、正明付属弥陀名号一流中通。於退代上。上來雖説定散両門之益、望佛本願、意在衆生一向專稱弥陀佛名。

《訓》

これより、第五に「菩提心念仏を抑ふ」と云ふを破せば、『集』に曰はく。

釈尊、定・散の諸行を付属せずして、ただ念仏のみを以て阿難に付属するの文

『観無量寿経』に云はく。「仏、阿難に告げたまはく。汝、好く是の語を持て、是の語を持てとは、即ち是れ無量寿仏の名を持てとなり」[25]。

『同経の疏』に云はく。「仏告阿難汝好持是語」と云ふより以下は、正しく、弥陀の名号を付属して、遐代に流通することを明かす。上来、定・散両門の益を説くと雖も、仏の本願を望むるに、意は衆生をして一向に弥陀仏名を専称せしむるに在り」[26]

註

(25)『観無量寿経』、『大正蔵』十二、三四六頁中。

(26)『観経疏』、『大正蔵』三七、二七八頁上。

《翻刻》

私云。○次散善中有二大小持戒行一。世皆以一爲。持一戒行【三〇丁オ】者是入真要也。破戒之者不レ可二往生一。又有二菩提心行一人皆一爲。菩提心是浄土綱要。若無二菩提心一者、即不可二往生一。又有解第一義行、此是理観也。人亦以一爲。○若無二理観一者不レ可二往生一。又有二讀誦大乗行一人皆以一爲。讀二誦大乗經一即可二往生一。若無讀誦行一者不レ可二往生一。○凡散善十一人、皆雖レ貴、而於二其中一此四箇行、當一世之人殊所レ欲之行也。以此等行一、殆抑二念佛一。〈巳上集文〉。

《訓》

私に云はく○

次に、散善の中に大小持戒の行あり。世皆おもへらく。持戒の行とは是れ入真の要なり。破戒の者は往生すべからず。また菩提心の行あり。人皆おもへらく。菩提心は是れ浄土の綱要なり。もし菩提心なくんば、即ち往生すべからず。また解第一義の行あり。これは是れ理観なり。人またおもへらく○

もし、理観無くんば、往生すべからず。また読誦大乗の行あり。人皆おもへらく。大乗経を読誦して、即ち、往生すべし。もし、読誦の行無くんば、往生すべからず○

凡そ散善の十一、人皆貴ぶと雖も、その中において、この四箇の行、当世の人の殊に欲するところの行なり。これらの行を以ては、殆ど念仏を抑ふ[27]〈巳上『集』文〉。

註

(27)『選択本願念仏集』「第十二章」、『昭法全』三三八頁～。

《翻刻》

【三五三頁上】決曰。先須二辨一定二念佛定散義一。問曰。依二善導一意、今所レ言念佛者、爲二是定善一、亦爲散善一耶。設爾何失。兩一方俱不審。若云二為二定善一者、觀經疏以二十三定觀一名定善一、以二三【三〇丁ウ】福九品一名二散善一。於彼九品中一所レ說二稱名行一也。豈爲二定善一乎。若云二

爲散善者、善導解釋引文殊般若經等文、多爲定善加行。稱名純熟位必可得心念成熟故。又觀經弁觀佛三昧經等、觀佛三昧、念佛三昧、其體是無差別。善導解釋亦以同之。又善導於稱名行立念佛三昧名。何可成立耶。

《訓》

決して曰はく。まづすべからく念仏定・散の義を弁定すべし。

問ひて曰はく。善導の意によるに、今言ふところの念仏とは、是れ定善とやせん、また散善とやせんや。たとひしからば、何の失あらん。両方倶に不審。もし「定善とす」と云はば、『観経の疏』に、十三定観を以ては定善と名づく。三福・九品を以ては散善と名づく。[28] かの九品の中において称名の行を説くところなり。豈に定善とせんや。もし「散善とす」と云はば、善導の解釈[29]に『文珠般若経』等の文[30]を引きて、多く「定善の加行」とす。称名純熟せん位に、必ず心念成熟を得べきが故に。また『観経』ならびに『観仏三昧経』等に、観仏三昧・念仏三昧、その体是れ差別なし。善導の解釈もまた以てこれに同じ、また善導、称名の行において念仏三昧の名を立つ。いかんが成立すべきや。

註

(28) 『観経疏』、『大正蔵』三七、二四七頁中。

(29) 『観念法門』、『大正蔵』四七、二七頁上。『往生礼讃』、『大正蔵』四七、四三九頁上。

(30) 『文殊般若経』、『大正蔵』八、七三一頁中。

《翻刻》

荅。立念佛三昧名者、是名於定善也。然称名者是念佛三昧加行也。雖称名位是為散善、從根本立名云念佛三昧也。是故從其根本言之、攝定善也。揔分別定散有四句。一唯散非定。謂。世間孝養父母等善乃至出世禮佛造塔等善。二唯【三一丁オ】定非散。謂。諸定根本心。三有通定散。謂。諸定加行善。四非定善非散善。謂。不善無記法是也。

《訓》

答ふ。念仏三昧の名を立つることは、是れ定善に名づくるなり。しかるに、称名とは是れ念仏三昧の加行なり。称名の位は是れ散善とすと雖も、根本に従へて名を立てて、「念仏三昧」と云ふ。是の故に、その根本に従へてこれを言へば、定善に摂するなり。

惣じて定・散を分別するに、四句あり。

一は、ただ散にして定にあらず。謂はく。世間の孝養父母等の善、乃至、出世・礼仏・造塔等の善なり。

二は、ただ定にして散にあらず。謂はく。諸定の根本心なり。

三は、定・散に通ずるあり。謂はく。諸定の加行善なり。

四は、定善にあらず、散善にあらず。謂はく。不善・無記の法、是れなり。

《翻刻》

於此中、就諸善分別其品類、有定散二位。以下唯定不通散善上

名定善。以唯散不レ通レ定善上名散善。雖三爾名通二二位一、定義爲レ勝。以二其根本是定一故、攝定善一名念佛三昧一也。其義如第一門決說。但疏九品散善中列レ之者、約二下輩臨一終稱名人一、不レ論二根本得定義一、唯取二至心稱名義一。此約人位一取散善義。若約二善體一者、是攝定善一也。

《訓》

この中において、諸善に就きてその品類を分別するに、定・散の二位有り。ただ定にして散に通ぜざる善を以ては定善と名づく。ただ散にして定に通ぜざる善を以ては散善と名づく。

称名は二位に通ずると雖も、定の義を勝れたりとす。その根本、是れ定なるを以ての故に、定善に摂して念仏三昧と名づくるなり。その義、第一門決に説くがごとし。ただ『疏』に、九品散善の中にこれを列ぬるは、下輩の臨終称名の人に約するに、「根本得定の義」を論ぜず。ただ「至心称名の義」のみを取るなり。これは人位に約して、散善の義を取る。もし、善の体に約せば、是れ定善に摂するなり。

《翻刻》

是故、觀經疏第四散善義云。五從二若念佛者一下、至生諸佛家一已一來、正顯五念佛三昧功能超一絶、實非四雜善得三爲二比類一〈云云〉。此【三一丁ウ】中既於散善義中一立三昧名一。此約善體一立【三五三頁下】名一也。此義如禮讃等釋一。於第一門一決之。約人位一取之、終不レ發二定心一故、攝散善中一也。

《訓》

是の故に、『観経の疏』の第四散善義に云はく。

五に、「若念仏者」より下、「生諸仏家」に至るまでより已来は、正しく、念仏三昧の功能超絶して、実に雑善を比類とすることを得るに非ざることを顕す[31]、と云云。

この中に、既に散善義の中において三昧の名を立つ。これは善体に約して名を立つるなり。この義、『礼讃』等に釈するがごとし。第一門においてこれを決す。人位に約してこれを取らば、終に定心を発せざるが故に、散善の中に摂するなり。

註

(31)『観経疏』、『大正蔵』三七、二七八頁上。

《翻刻》

問。言三昧一者、具名三摩地一。光法師倶舎論記云。梵名二三摩地一、此云等持一。通定散一通三性〈云云〉。爾者、依レ云二三昧一、不レ可三必爲二定善一。況散善中出之一。明知。称一名唯爲散善一。何以定善一可レ言三爲二本一乎。荅。凡言三昧一者、其義非一途一。如二汝所レ出光法師釋一、通定散一通三性一。雖レ然光師解釋、唯取二大地法中三摩地心所一爲本一故、其體不レ通二慧心所等一。然此三昧名字、亦有三以レ慧爲二本一。

《訓》

問ふ。「三昧」と言ふは、具さには「三摩地」と名づく。光法師[32]の

『倶舎論の記』に云はく。

梵には三摩地と名づく。ここには等持と云ふ。定・散に通じ、三性に通ず[33]、と云云。

しからば、「三昧」と云ふによりて、必ずしも定善となすべからず。況んや、散善の中にこれを出す[34]。明らかに知んぬ。称名はただ散善とす。何ぞ「定善を以て本とす」と言ふべきや。

答ふ。凡そ「三昧」と言ふは、其の義、一途に非ず。汝が出すところの光法師の釈のごときは、定・散に通じ三性に通ず。しかりと雖も、光法師の解釈は、唯だ大地法の中の三摩地の心所を取りて本とするが故に、その体、慧の心所等に通ぜず。しかも、この三昧の名字もまた慧を以て本とすることあり。

註

(32) 「光法師」、普光（唐代）。玄奘に師事（『望仏』五、四四〇八頁）。

(33) 『倶舎論記』、『大正蔵』四一、七四頁下。

(34) 【参照】『観経疏』、『大正蔵』三七、二七八頁上。

《翻刻》

華厳経中、天鼓爲二兜率天子一説法一中云。如二我天鼓【三二丁オ】不生不滅一、色受想行識亦復如レ是不生不滅。汝一等若能於此一悟解、應レ知。則入レ無依智印三昧一。疏釋云。言無依印者、既悟一解無生一。則能一所雙一絶、儻然レ靡レ據故曰無依。以二斯智印一、印一定萬法一、不レ収不レ攝、任心自安、故稱三昧〈巳上〉。如此一例非レ一。

《訓》

『華厳経』の中に、天鼓[35]、兜率天子の為に法を説く中に云はく。

我れ、天鼓の不生不滅なるがごとく、識受想行識もまた是のごとく不生不滅なり。汝ら、もし能くこれにおいて悟解せば、知るべし。則ち、無依智因三昧[36]に入るなり[37]。

『疏』に釈して云はく。

「無依因」と言ふは、既に無生を悟解す。則ち、能・所双絶して、儻然[38]として拠ろ靡きが故に、「無依」と曰ふ。この智因を以て、万法を印定して、収らず摂せず、心に任せて自ら安らかなるが故に「三昧」と称す[39]〈巳上〉。

此のごときの例、一にあらず。

註

(35) 「天鼓」、『大正蔵』は「鼓」。天の鼓撃つ者無くして自然に鳴る天中の太鼓（『望仏』四、三七八〇頁）。

(36) 「無依智因三昧」、『大正蔵』は「無依因三昧」。→「無依三昧」何ものかを拠り所にすることができない三昧（『中仏』下、一六〇七頁）。「智印」物や菩薩が内に具えている智慧を象徴する三摩耶形（『中仏』中、一一六六頁）。「智印三昧」一切如来の深いさとりの智慧を象徴する手指の組み合わせで表現した宗教的瞑想の世界（『中仏』中、一一六六頁）。

(37) 『華厳経』、『大正蔵』十、二五六頁中。

(38) 「儻然」、志を失う様（『大漢和』一、九六七頁）。

(39) 澄観『大方広仏華厳経疏』、『大正蔵』三五、八六七頁下。

《翻刻》

又於念佛名言一有多種義。或念佛名字、或念佛相好一、或念光明一、或念本願一等、如諸經說。雖レ有二如レ此諸義不同一、依善導御意一、以称名名二念佛三昧一者、源依二定善一也。何一以得レ知。往生礼讃等中引文殊般若經等一、取定心加行称名一。又觀經存像觀真身觀等一名念佛三昧一。善導觀經疏、因此義便一多明称名功一【三二丁ウ】德一。又引下華嚴經功德雲比丘所一得念佛三一昧文上、明念佛功德一。明知。是以根本定心一爲レ本也。若不レ爾者、所レ引證據等、皆不レ可二成立一。

《訓》

また念仏の名言において多種の義あり。或いは仏の名字を念じ、或いは仏の相好を念じ、或は光明を念じ、或いは本願を念ずる等、諸経に説くがごとし。かくのごときの諸義の不同ありと雖も、善導の御意によるに、称名を以て念仏三昧と名づくるは、源、定善によるなり。

何を以てか知ることを得る。『往生礼讃』等[40]の中に、『文殊般若経[41]』等を引きて定心加行の称名を取る。また『観経』に、「像観[42]」・「真身観[43]」等を説きて「念仏三昧」と名づく。善導の『観経の疏』に、この義便に因んで、多く称名の功徳を明かす。また『華厳経』の功徳雲比丘所得の念仏三昧の文[44]を引きて、念仏の功徳を明す[45]。明らかに知んぬ。是れ根本定心を以て本とす。もししからずんば、引くところの証拠等、皆成立すべからず。

註

(40) 『往生礼讃』、『大正蔵』四七、四三九頁上～中。『観念法門』、『大正蔵』四七、二七頁上。

(41) 『文殊般若経』、『大正蔵』八、七三一頁中。

(42) 「像観（像想観）」、『観無量寿経』、『大正蔵』十二、三四三頁中。

(43) 「真身観」、『観無量寿経』、『大正蔵』十二、三四三頁中。

(44) 『華厳経』、『大正蔵』九、六八九頁下～六九〇頁中。

(45) 『観経疏』、『大正蔵』三七、二四九頁下。

《翻刻》

是一以、觀經疏第一、云二雖言未證一〈如前第一門決引之〉。未一證之【三五四頁上】言、指二定心根本一也。又觀念法門、明見佛浄土三昧増上縁義一中云。如レ此想者名為粗見。此謂。覺想中見故云粗見一。若得二定心三昧及口称三昧一者、心一眼即開、見二彼浄土一切荘嚴一〈等云云〉。此中既粗一見覺一想外、口称三昧成就心一眼見浄土一。前影像成就也。此本質成就也。前加行成満、此根本成満也。

《訓》

是れを以て『観経の疏』の第一に、

雖言未証[46]

と云ふ〈前の第一門決にこれを引くがごとし〉。「未証」の言は、定心の根本を指す。又『観念法門』に「見仏仏土三昧増上縁」の義を明かす中に云はく。

かくのごとく想う者を、名づけて「粗見」とす。これは謂はく。覚想の中に見るが故に「粗見」と云ふ。もし「定心三昧」および「口称三昧」を得つれば、心眼即ち開きて、かの浄土の一切の荘

厳を見る[47]〈等、と云云〉。

この中に、既に「粗見」「覚想」の他に「口称三昧成就して、心眼、浄土を見る」と。前は[48]「影像成就」なり。これは[49]「本質成就」なり。前は「加行成満」。これは「根本成満」なり。

註

(46)『観経疏』、『大正蔵』三七、二四九頁下。
(47)『観念法門』、『大正蔵』四七、二六頁上。
(48)「前」、『観経疏』「雖言未証」。
(49)「此」、『観念法門』「心眼見浄土」。

《翻刻》

又處處示念佛行儀、皆修定方法也。謂。令止餘縁者、多是【三三丁オ】修禪軌則也。謂。修禪要法、必須正其方法一心一境爲先。若其方法不正、是爲邪觀。若雜縁、難得一心。若得與正境合一心相應、信敬慙愧轉多名利貪愛稍輕、不待順次、法利且先。雖在生死、漸異凡心、華相既現前。果報何有疑。此誡策初心秘要也。若相翻此者、其行可爲虚僞。雜縁乱動失正念。與佛本願不相應。何得往生乎。善導教誡、專在于此條。此禪門一行、息諸縁務、永絶散乱、心澄於静境、身離乎喧雜。如此人、所當其根也。

《訓》

また処処に「念仏の行儀」を示すこと、皆「修定の方法」なり。謂はく。余縁を止めしむるは[50]、多く是れ修禪の軌則なり。謂はく。修禪の要法、必らずすべからく、その方法を正して、一心一境を先とすべし。もし、その方法正しからざれば、是れを邪観とす。もし雑縁すれば一心を得難し。もし正境と合して一心相応することを得つれば、信敬・慚愧、転じて、多く名利・貪愛、稍軽し、順次を待たずして、法利、且く先だつ。生死に在りと雖も、漸く凡心に異なり、華相既に現前す。果報、何ぞ疑ひあらん。これ誡に初心を策す秘要なり。もし、これに相翻せば、其の行、虚偽とすべし。雑縁乱動して、正念を失せん。仏の本願と相応せざらん。何ぞ往生することを得んや。

善導の教誡、専らこの條に在り。この禪門の一行は、もろもろの縁務を息めて、永く散乱を絶ちて、心、静境に澄み、身に喧雑を離る。此のごときの人、その根に当るところなり。

註

(50)「令止余縁」、【参考】良忠『伝通記』「定一心者三昧相応都息余縁名為一心玄義分云想心都息縁慮竝亡〈已上〉」（『大正蔵』五七、六四八頁下）。『観経疏』「言正受者想心都息縁慮並亡三昧相応名為正受即地観文中説言若得三昧見彼国地了了分明即合上教我正受一句」（『大正蔵』三七、二四七頁下）。

（よねざわ　みえこ　嘱託研究員　浄土宗総合研究所嘱託研究員）